

凡百凡歌後拾遺集①



「はじめに」

昨年五月明けは、天皇の生前退位・即位礼に改元、御代「令和」誕生に十連休の祝賀行事にと、世間はわきかえりました。「令和」は国民から祝福され厚意を以て受け入れられました。即位礼正殿の儀、大嘗祭と国事を恙なく済ませ、国民等しく輝ける新時代の到来を予感しました。

折も折、年明けて中国武漢発コロナウイルス感染症が日本に上陸したのは、一月末のことです。相も変わらぬ人間行動力学へコロナ君は警鐘を鳴らし、人類社会へ突如挑戦状を突き付けて来たのです。その後感染症の猛威は留まるところを知らずここ数ヶ月にして、世界全域に蔓延し、クラスター・ロックダウン・パンデミックの言葉が飛び交い連日紙上をにぎわせ、現在進行形です。

そのため思いも寄らず、私も新年会の出席を最後に、その後予定していた余暇活動は全て中止、延期を余儀なくされました。自粛生活を続けています。

そんな中、幸運にも次世代へのバトンタッチが一つ実現しました。念願のマイホームを完成させたこの二月から、娘家族一家三人が隣地に引っ越して来ました。

振り返る一年、今日を大切にメモした凡歌を後拾遺集の小冊子に纏めてみました。

令和二年五月

〔賀状歌〕

落日の記念会堂衣替え

世紀引き継ぐ早稲田アリーナ



〔自然詠〕

初雪を見ぬ間立春わが庭の

紅白梅や寒气和らぐ

満開の染井吉野に粉雪が

春に戸惑い竦む花びら

関東は四月連日底冷えて

寒の戻りか名残雪舞う

夕方のお散歩コース六千歩

上る石段蝉しぐれ聞く

強風を南面に受け通過待ち

十九号が伊豆半島に

神無月雨の晴れ間の地鎮祭

駐車場跡安全祈願

歩道橋上り下りに一苦勞

跨ぐ道路の景色一服



〔社会詠〕

七度目の亥年迎えたこの春に 元号代わる御代が令和に

賢くもご即位の礼天照す 皇居松の間令和の光

令和初国賓迎え先ずゴルフ 日米首脳新ステージへ

弥縫策ひび割れ亀裂埋められず 中流意識喪失社会

いつの間にタツチタツチが幅利かす

キャッシュレス化の波追い風に

世代間格差是正のキーワード 年金制度財源確保



強国の軍拡競争過熱する AI兵器チキンレースに

日韓の断絶亀裂奥深く 埋められぬ溝歴史と文化

中国の海洋覇権目に余る 空母キラーのミサイル兵器

頑なな北朝鮮の挑発を 誰が止めるか模索が続く

民主化が問い直される香港の 一国二制度存亡の危機

ミレニアル舞台の主役アジアより 大きく動く巨大な民意

首脳たち共栄圏の奪い合い いつまで続くこの政治シヨウ

非核化か制裁解除折り合わず 米朝首脳思わぬ誤算



あり得ないトリクルダウン今は死語 格差社会の助長を煽る

少子化と長寿化進むわが国で 奇策はありや年金論議

止まらない列島各地ミスマツチ 見えて進まぬ地方創生

何目指す働き方の改革は 正規不正規溝を深めて

相模原伊勢丹店舗閉店に 地域振興担い手消える

猪の出没騒ぎこの師走 大捕物に街は騒然



本塁打つづく二塁打三塁打　安打大谷サイクルヒット

名を馳せる世界ランクになおみ節　全豪テニス女子シング

ルス

〔自戒詠〕

授かりしわが人生の終焉は　大海原か山の彼方か

偶然が重なり我が身支配する　今を生きてる自分に感謝

歴史観人それぞれに異なれば　目盛り合わそう今の時点に

他人事と思いいしことを気づかずに　廻り巡って自分に還る

アドバンスケアープランニング考える　人生百年時代に向けて



父親の口癖だった合言葉 三代続けばな噛みしめる

次世代へバトンタッチが鍵となる 世代を越えてどう棲み分

ける

バッテリー切れかけわが身振り返る 賞味期限の空しさ怖さ

差し迫るあの世への途手探りで 兎角世間は広くて狭い

見直そうコミュニケーション能力を 書く読む話すツールが鍵に

弱腰が逃げ腰となり前のめり 老躯むち打ち乱れる歩調

待たされる時間は長く待たせてる 時間短くこの世の習い



聞いてみて分からなければ行ってみる 行動範囲狭まる中で

追いかけて追い越されたら追い越して 歩幅は振り子何時かは

止まる

諭したい人の心を傷つける 暴言禁言ってはならぬ

誰にでも迎えの車やってくる 心のカギはかけ忘れずに

〔家族詠〕

喜寿傘寿迎えてからは急降下 夫唱婦随でこれからの日々

血糖値あまり気にすることもなく 効くインシュリン頼りの余生

係り付け医療機関の選択は 終末医療懐刀



目の黒い中が潮時お迎えの

車待つ身に余命を託す

裏通り歩く気力が萎えるとも

それに輪をかけ方向音痴

上洛は新幹線でお彼岸会

檀家信徒とご先祖供養

夢見して危機一髪の展開に

目覚め思わず胸撫で下ろす

晴れて今日佑奈卒業社会人

紅白梅が仄かに香る

捨我精進学園の丘忘れまい

晴れて卒業教旨碑を背に

社会人孫の佑奈は第一歩

自ら招くよもやの試練



遠来の孫と戯れボウリング 投球の度手足が痺れ

春彼岸一日遅れ京の街 息子家族と座談ひととき

孫広場鹿沼公園ゴーカート 流れる汗を拭う間もなし

ララちゃんは室内犬の模範生 躰を守り絆深める

「交友詠」

還暦後二巡りして干支亥年 熱き友情臉に浮かぶ

カラオケは馴染みの四人歌広場 高卒同期忘年集い

過ぎ去りし日々の思い出語らいが 延々続く永楽倶楽部



バンケット最後の集い暑気払い 稲門の友和む昼席

会席はホームタウンの池袋 平成令和世代跨ぎで

久遠会乾杯音頭指名受け 今昔の感思いを込める

別れ際交わす握手に温もりと 余韻が流儀また逢う日まで

〔余暇詠〕

花冷えの上野のお山美術館 お花見客を分けて参観

雑踏を抜けて銀座は裏通り 画廊訪ねて和む一時

夏休み早直一家の里帰り 歴史のロマンルート散策



折節に万葉集を紐解きて

古代を偲び現世に光

芋煮会健康テニスお仲間と

秋の陽伸びる杉本農園

梅雨空を疎んじ自模る四暗刻

親荘の役満心が晴れる

誘われ老人クラブペタンクに

広場で振り子一汗かいて

背泳ぎと水中ウオーク二往復

平成楽日横山プール

気まぐれの春の嵐に煽られて

相手コートにボール届かず



満開のツツジの花がお出迎え

心うきうき健康テニス

夏モードさわやか交流テニス会

楽しむシルバー男女百人

古傷を痛めながらも直向きに

晩年テニスコートに通う



郡司直智（ぐんじ・なおち）

著作品

『東西二大国讃歌集』一九九五年

『わが早稲田アデイザデイズ』一九九七年

『母タカ遺稿短歌集』二〇〇五年

『テニスと短歌』二〇〇九年（フォーティイラブ

三〇周年記念誌分担執筆）

『わらべ会（歌日記）アデイ・ザデイズ』

二〇一八年

『凡百凡歌』第一集〜第二二集（一九九八年〜二〇一九年）

凡百凡歌後拾遺集①

詠・編者 郡司 直智

初版発行 令和 二年五月三一日